秋田県の土偶

冨樫泰時　　武藤祐浩

1. はじめに
2. 土偶発見史
3. 秋田県の土偶
4. おわりに

1. はじめに

秋田県の土偶研究は，現在までほとんど進められていないというのが現状である。近年になって冨樫が秋田県の土偶について概観したものがあるだけである。(1)

これは秋田県内で現在までどれだけ発見され，それがおよそどの時期のもので，どこの遺跡から発見されたものであるか，という基礎的な資料を整理したものである。したがって土偶の研究は，これからはじまると考えられる。土偶の研究はこれからはじまるが，土偶等の発見史には歴史があり，まずそれを簡単に紹介し，その後で秋田県の土偶資料を各時期ごとに紹介することにしたい。

2. 土偶発見史

秋田県の土偶の発見等の歴史は古く，また全国的に紹介されたのも早い方であろうと思われる。記録に残っているものでは1865年（慶応元年）5月8日秋田県大曲村（現大曲市）で発見された土偶が最初のものであろう。この土偶は1887年（明治20年）8月に真崎勇助によって『東京人類学会雑誌』第二巻18号に「古代土偶図」として紹介されている。現在も大曲市にあり秋田県の文化財に指定されている。土偶の左脚が欠損しているだけのもので，伴出土器などは不明だが縄文時代後期の土偶である。

その後，1902年前後（明治37，38年頃）に平鹿郡十文字町二ツ橋の「稲荷神社西畑ヨリ」発見された土偶が『植田の話』（近　泰知著）の中に図示されている。その図を見ると土偶は頭部のもので，正面，裏面，それに左右の側面図がある。頚部の破損した所に注記があり，それに「黒土を混ず」とあり，これはアスファルトで接着した痕跡であった可能性がある。この土偶は後期後半のものである。

1916年（大正5年），大野雲外が由利郡上浜村大砂川（現象潟町）に遺跡調査に来た折，地元

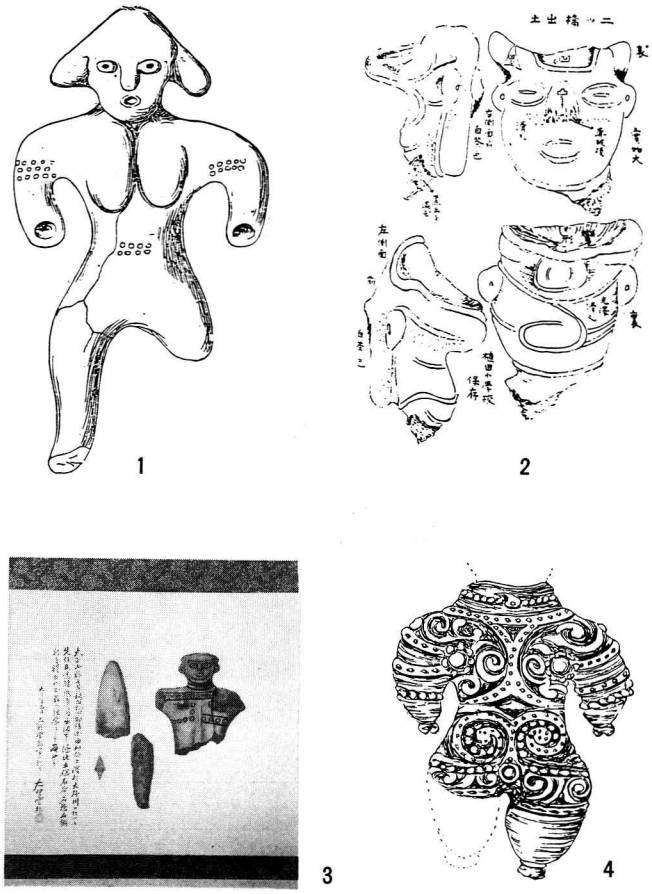

図1　秋田県内出土の土偶(1)

1.　真崎勇助が紹介した土偶図　2.　近泰知が描いた土偶の図　3.　大野延太郎が描いた土偶の図　4.　佐藤初太郎が描いた中山遺跡発見の土偶

の人から寄贈された遺物の中に土偶があった。その時の領収書と大野雲外が書いた絵が残っている。それを見ると，領収書は9月11日付けで東京帝国大学総長理学博士男爵山川建次郎から出されたものである。また大野雲外が書かれた絵には土偶・磨製石斧・石槍・石鏃が描かれその左端に下記の文がある。

大正五稔七月秋田縣下羽後国
由利郡上濱村大砂川に於ける
先住民遺跡調査之為出張せし
際此土偶石斧石槍石鏃類を得
たれば茲に記念として届けり
九月十三日
人類学教室に於て
大野雲外　印

この絵を見ると土偶は上半身が残り，両手は欠けたもので，胸部上半に二本の平行沈線が施され，その中に縄文が施文され，その下に体の中心線より右側にL字形に円形文（竹管？），左側には二本の沈線の間に右側と同様な円形文の施された土偶である。後期中葉の土偶と思われる。

その後，杉山寿栄男の『日本原始工芸』の中に秋田県内の遺跡――麻生（二ツ井町）出土の岩偶，御所野（秋田市），上浜村（象潟町），旭（横手市）などの遺跡から出土した土偶が紹介されている。また小西宗吉により六郷町石名館遺跡出土の土偶等が『史前学雑誌』等に紹介されている。

これらより以前，土偶ではないが，「人面付環状注口土器」は1843年（天保14年）に発見されているし，麻生遺跡出土の有名な土面は1897年（明治30年）に東京大学に寄贈になっている。

その後麻生遺跡からは地元の菊池保太郎氏によって多くの土偶が採集され保管されているが図化などされないまま現在に至っている。

このように土偶は早くから発見され，その数も1,000点を超すものと考えられるが，本格的な研究はほとんどなされないまま現在に至っているのである。

なお，明治31年の東京人類学雑誌第143号等に大野延太郎が麻生遺跡の土偶などが紹介されて

いるが，それらは省略した。

3.　秋田県の土偶

秋田県内の縄文時代の遺跡の中で140近い遺跡から土偶が発見されている。そのうち50ヶ所近い遺跡から発見されている土偶が未だ図化されていない。したがって秋田県内で現在まで発見されている遺跡の3分の1強の土偶が研究者の目にふれていないといってよい。その中で，図，写真等からカード化できたものが420点ほどある。それを各時期ごとに表にしたのが表1である。

その分布を全県的に見ると，全県的に土偶は発見されており，とくに土偶の多い地域といったかたよりは現在のところ認められない。数は晩期が圧倒的に多い。また早期の土偶は現在のところまったく確認されていないし，前期の土偶も現在1点発見されているにすぎない。

また弥生の土偶が14点確認され，この時代まで土偶が造られ続け

表1

時　期	数	遺跡数
前　期	1	1
中　期	64	29
後　期	217	48
晩　期	260	57
弥　生	14	4
合　計	556	140

表2　秋田県土偶出土遺跡一覧表

(1985.6　冨樫泰時作成　1989.12　改編・補遺)(2)

市町村	遺跡名	点数	時期 早	前	中	後	晩	弥生
小坂	中小坂	1				1		
	白長根館Ⅰ	1				1		
	はりま館	●		岩				
	内ノ岱狸沢	●		岩				
	下大谷地Ⅲ	●				●		
	大地	●				●		
	手紙沢	●			●			
	大岱Ⅳ	●		岩				
鹿角	大湯　B	11				11		
	D_1	3				3		
	D_2	10				10		
	柏崎	●					●	
	天戸森	2			2			
	東在家	1					1	
大館	塚ノ下	2				2		
	萩峠	11			3	8		
大館	上ノ山Ⅰ	●		岩				
	諏訪台C	2				1		1
比内	本道端	3			3			
	休間口	●				●		
	横沢	1				1		
田代	茂谷下岱	●		岩				
鷹巣	藤株	40				28	13	
森吉	塚の岱	1					1	
	向本城	2					2	
	桐木岱B	●					●	
	小滝新兵衛岱Ⅱ	●					●	
合川	摩当沢	●					●	
二ッ井	麻生	4					4	
峰浜	目名潟	●					●	
能代	館下Ⅰ	6			3	3		
	杉沢台	3					3	

市町村	遺跡名	点数	時期					
			早	前	中	後	晩	弥生
能代	真壁地	7				7		
	大野	●					●	
	柏子所	●					●	
山本	古館堤頭	2				2		
	鳥矢場	1					1	
琴丘	高石野	12				4	8	
八郎潟	沢田	2			2			
五城目	中山	5				1	4	
	町村	1					1	
若美	横長根A	10						10
男鹿	三十刈Ⅰ	1			1			
	大畑台	1			1			
	泉野	1			1			
	田中	3				3		
	五輪野	●						
	上鮎川	●					●	
昭和	狐森Ⅱ	●				●		
秋田	潟向Ⅲ	●						●
	上新城中	15				1	14	
	桂沢	1					1	
	戸平川	1					1	
	下堤A	10			10			
	坂ノ上A	3			3			
	B	1			1			
	E	4			4			
	F	6			6			
	湯ノ沢C	1					1	
	地蔵田B	●					●	●
	地方	127					127	
	新屋浜	2					2	
大内	鹿ノ爪	●				●		
本荘	大浦	1				1		

市町村	遺跡名	点数	時期					
			早	前	中	後	晩	弥生
象潟	菅先	●				●		
	ヲフキ	●				●		
由利	大台	●			●	●		
矢島	下山寺	1				1		
東由利	湯出野	7				2	5	
	片符沢Ⅰ	21				21		
河辺	駒坂岱Ⅰ	1			1			
	風無台Ⅰ	1			1			
雄和	鹿野戸	4				1	3	
協和	上ノ山Ⅱ	1		1				
	木形台Ⅱ	17				11	6	
	野崎	●					●	
西仙北	上野台A	2			1			不明 1
	上の台Ⅱ	●					●	
	玄馬台	●					●	
	殿屋敷	●					●	
神岡	岳下	●					●	
角館	壇の上	2					2	
田沢湖	黒倉B	6			6			
	武蔵野	●					●	
大曲	成沢Ⅱ	●					●	
	館の下	●				●		
千畑	一丈木	1			1			
六郷	石名館	3				1	2	
横手	中杉沢	1			1			
	盤若寺	●					●	
	オホン清水	●					●	
	手取清水	3					3	
	旭	●				●		
雄物川	兵部ケ沢	●					●	
羽後	大久保杉宮	3			3			
山内	相野々	●					●	

市町村	遺跡名	点数	時期					
			早	前	中	後	晩	弥生
平鹿	上都	●					●	
	平沢Ⅰ	●					●	
十文字	二ッ橋	●				●		
増田	八木	52				52		
	平鹿	16					16	
	梨ノ木塚	3				3		
稲川	東福寺村上	1			1			
	宝龍台	1			1			
	中野	●					●	
	女夫沼	●					●	

市町村	遺跡名	点数	時期					
			早	前	中	後	晩	弥生
稲川	大谷	●					●	
皆瀬	川向上野	●					●	
東成瀬	下田大楡	●				●		
?	御嶽堂	●					●	
湯沢	鐙田	13					13	
	中屋敷	●				●		
	須川	●				●		
雄勝	川連	●					●	
不明		6			1	1	4	

●印はカード化されていないもの

ていることも見のがすことのできない事実である。このような現状をもう少しくわしく見てみることにしよう。

(1) 前期の土偶

現在1点しか発見されていない。出土した遺跡は仙北郡協和町中淀川にある上ノ山Ⅱ遺跡である。土偶は破片で全体がよくわからないが，板状を呈し，頭部は三角形を呈すが，頂部は少し平坦となる。頭部の下に径2cmほどの円形の凹みがある。他は欠損していて不明。この土偶は大木4式の土器などと一緒に出土したもので前期の土偶と見て間違いのないものである。現在のところ秋田県内の中ではもっとも古いものである。

青森県等では前期の円筒下層の土器様式に伴う土偶が発見されているが，秋田県内では現在のところ前期の円筒下層土器様式に伴う土偶は発見されていない。しかし，この土器様式に伴う岩偶がいくつか発見されている。それは茂屋下岱遺跡(田代町)，はりま館遺跡・内ノ岱狸沢遺跡・大岱Ⅳ遺跡（小坂町)，上ノ山Ⅰ遺跡（大館市）である。中でも茂屋下岱遺跡出土の2点はその後の岩偶の祖型をなすものと考えられ，県内ではもっとも古い岩偶である。これらの岩偶は円筒土器様式の分布圏である米代川流域の中・上流域にしか発見されていない。

(2) 中期の土偶

中期になると土偶の発見例は増加し，29遺跡から64点の土偶が発見されている。その時期も中期の前半からある。中杉沢遺跡（横手市)，黒倉B遺跡（田沢湖町)，坂ノ上F遺跡（秋田市）出土の土偶は中期初頭の代表的なもので，しかも完形に近いものである。

中杉沢遺跡の土偶は，板状土偶で，頭部は上から見ると円形に近く，頂部を凹ませ，顔の表現

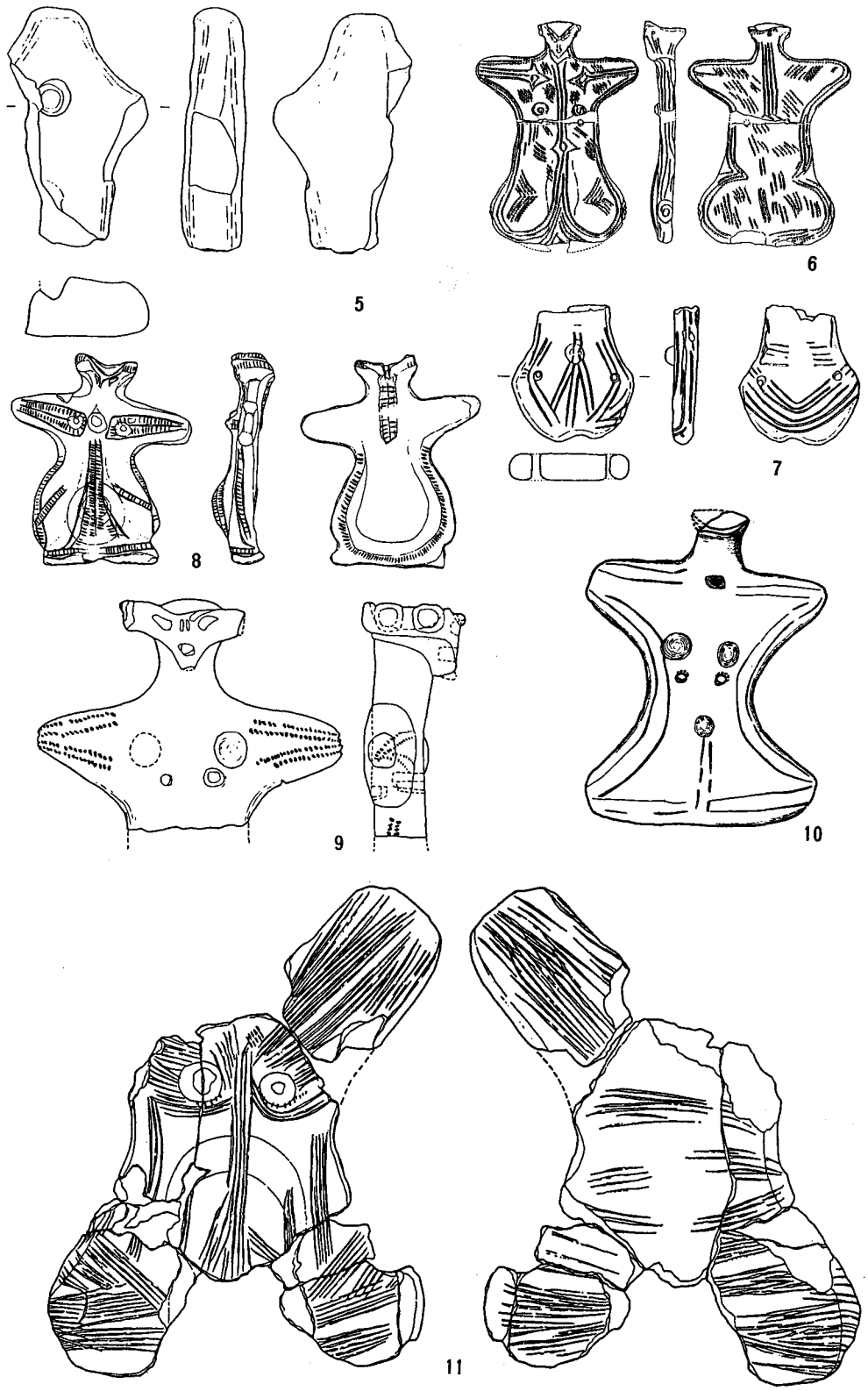

図2　秋田県内出土の土偶(2)

（目，鼻，口など）はまったくない。胸部は粘土粒を貼り付けた乳部，その下に二つの貫通孔があり，ヘソも乳部と同様に表現される。正面の端部に沈線２本で文様が施され，ヘソから下にも沈線を縦に施して足を表現している。この土偶は大木7a式に伴う土偶と考えられる。黒倉Ｂ遺跡の土偶は中杉沢の土偶同様板状土偶である。顔は三角形で眉，目，鼻が具体的に表現され，頭頂部を少し凹ませている。胸部に粘土粒を貼り付けた乳部，その下に二つの貫通孔がある。腹部を少しふくらませている。正面及び背面に撚糸を押捺した文様によって体の各部が表現されている。足は中央部下端に凹みをつけて二本足を表現している。この土偶は大木7b式に伴うものと考えられる。

坂ノ上Ｆ遺跡の土偶は板状土偶である。頭部は上から見ると小判形を呈し，頂部が少し凹む。顔は眉，目，鼻がしっかりと表現されている。正面の胸，腹部等の凸部の表現は黒倉Ｂ遺跡のものと同様であるが，より強い表現となっている。すなわち乳部，腹部が大きく表現されている。頭部，正面，背面及び側面に「沈線と半截竹管状工具内面による連続爪形文」を施している。足は正面下端を背の方に凹ませて表現している。この足の表現と，両側縁の下部が凹んでいる所が黒倉Ｂ遺跡の土偶と違うが他の全体の形は非常によく似ている。この土偶は坂ノ上Ｆ遺跡の15号住居跡から出土したもので，この住居跡には頭部が鍔状をなし，その下に「凹溝をもつ石棒」が伴っている。また私の記憶では中杉沢遺跡の土偶も住居跡から出土し，その住居跡に石棒が伴っていたように思う。このように完全に近い土偶が出土し，それが石棒の伴う住居跡から出土していることは，この時期の土偶の性格を考える上に重要であろう。

これらの土偶はいずれも秋田県の南部に分布している大木土器様式に伴う土偶である。北部に分布する円筒土器様式に伴う土偶は館下Ｉ遺跡(能代市)，萩峠遺跡(大館市)，本道端遺跡(比内町)などから出土しているが，発見例は少ない。その中で萩峠遺跡出土の土偶は板状で十字形土偶と推測され，しかも幅が25cm(腕の部分)以上あると思われる大形のものであることが注目される。

中期の土偶は他に大木8b式のものと思われる土偶が大久保遺跡（羽後町）から発見されている。この土偶は，頭部，左手，両足を欠損しているが，ほぼ全体は推測できる。両腕は直線的に開き，体部下半が台形状に少し開き，足は前に突き出していたものと思われる。正面にＴ字形に粘土紐を貼り付け，両端を少し高くして乳部とし，垂下された粘土紐の下端がヘソになる。文様は沈線で三角形文，渦巻文等が施されている。この土偶は腰部と脚部の接合に芯材を用いたらしく，欠損部分に円形に炭化材が認められる。土偶製作過程を知る一つの手懸りとなる資料である。この遺跡から他に大形の右脚が発見されている。脚部の長さが13cm，足の大きさが７cmある。文様は太い沈線で横に施されている。大形の土偶は坂ノ上Ｆ遺跡からも出土している。頭部は欠損しているが現存しているだけで高さ27.5cmありおそらく30cmを超す大きさのものであったと思われる。中期の後半から末期の土偶の発見例は少ない。その中にあって天戸森遺跡（鹿角市）出土の土偶，本道端遺跡出土の土偶が注目される。天戸森遺跡は大木8b～９式の良好な土器を沢山出土した遺跡で，中期後半の大集落遺跡である。その発掘調査で土偶が２点出土した。右手と胴下半が欠損しているが，頭部，左手，胸部が残っている。全体の形は板状で十字形の土偶を思わせ

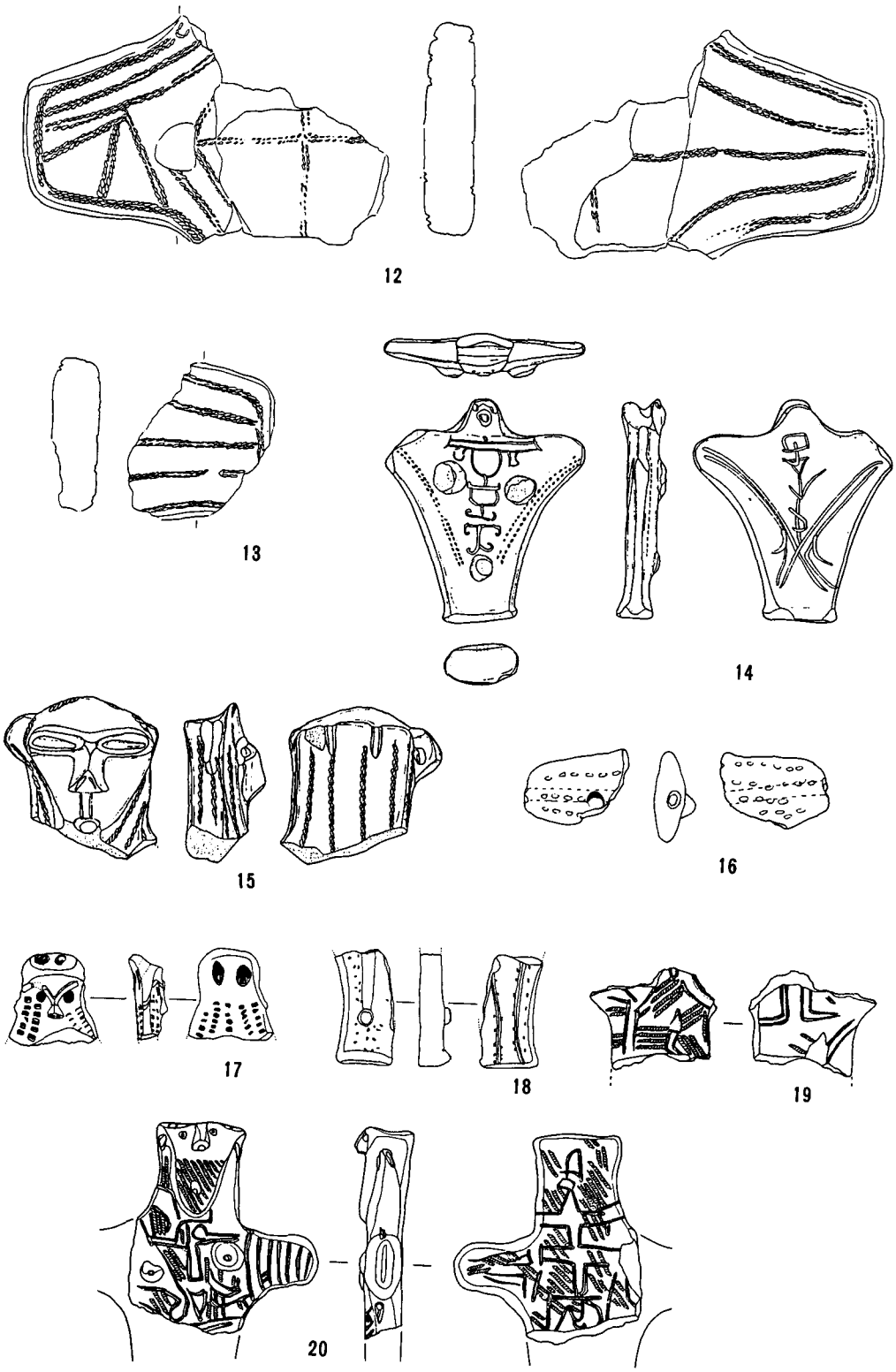

図3　秋田県内出土の土偶(3)

る。頭頂部は少し凹み顔は二等辺三角形を呈し，上部に目，鼻を表現し，少し離れた下に口がある。鼻の下の長い顔で十字形土偶に比較的多い顔である。文様は縄文と沈線で施され，沈線で三角形文，十字形文などが施されている。土偶全体の形は円筒土器様式に伴う形状に近いし，顔の表現も同様であるが，文様は大木土器様式に伴うものに近い。胴下半や脚部がどんな状態であったかはっきりしないが両方の特徴をそなえた土偶として注目されるものである。本道端遺跡の土偶は報告書等では大木10式に伴うものと見ているようだが，全体が板状で十字形を呈し，頭部と顔の表現，それに脚が分かれず一本に表現されていることなどから円筒土器に伴う土偶と考えてよいであろう。このような土偶が円筒土器様式の最後のものと考えられる。

以上見てきたように中期の土偶は，秋田県北部，すなわち米代川流域に分布する円筒土器に伴う土偶と，南部の大木土器様式に伴う土偶とははっきりと違った形を示す。しかし中期後半になって，大木土器様式が北上するにつれて，両方の特徴をあわせもつ土偶も作られる。また円筒土器様式の伝統をもつ土偶も造られ続けていたものと考えられる。

（3） 後期の土偶

後期の土偶はさらに発見例が増加し，現在まで217点の土偶が発見され，土偶の出土する遺跡も48ヶ所ほどになる。土偶の姿は頭，顔，手，足など，より人間に近い形となり，しっかりと表現されるようになる。その代表的なものを紹介しよう。

前半の土偶の代表的なものに塚の下遺跡（大館市）出土の土偶がある。体全体は板状を呈し頭部を少し前に突き出し，両腕は自然に下げ，手は凹みを施して表現し，脚はO脚で足先を少し前に出している。この土偶には乳部の表現はまったくなく，ヘソが粘土粒を貼り付けて表現しているだけである。顔は楕円形で眉を逆三角に少し盛り上げて表現し，その頂部（下端の角に）に鼻がある。目は眉の直下にアスファルトを入れて表現している。体部に文様はまったく施されていない。この土偶と一緒に板状土偶も出土している。胴部だけの土偶だが，正面には乳部が二つ粘土紐の貼り付けによって表現され，その他には沈線で正面には鎖状文などが施され，背面には菱形文，縦位の沈線文が施されたものである。これらの土偶はいずれも後期前半の十腰内Ⅰ式土器に伴った土偶である。同じ時期の土偶として真壁地遺跡（能代市）出土の土偶があるが，やはり塚の下遺跡と同類のものが出土している。

南の方では片符沢遺跡（東由利町），八木遺跡（増田町）など出土の土偶がある。片符沢遺跡からは21点，八木遺跡からは51点の土偶が出土し，一つの遺跡で多くの土偶を出土する遺跡が出現する。また八木遺跡のように所謂普通の土偶の他にポーズをとる土偶，大形の土偶で，しかも中空の土偶が造られはじめる。大形で中空の土偶の足の下には穴があけられたものもあり使用目的も多種であったことを思わせる。さらにこの遺跡からは盛岡市萪内遺跡から出土した大形の土偶と非常によく似た土偶の頭部が出土している。土偶の頭部を最初から造らなかった土偶もある。この土偶は，胴上半が残っているもので，両腕は短かく左右にのばし，その腕の下から肩に向っ

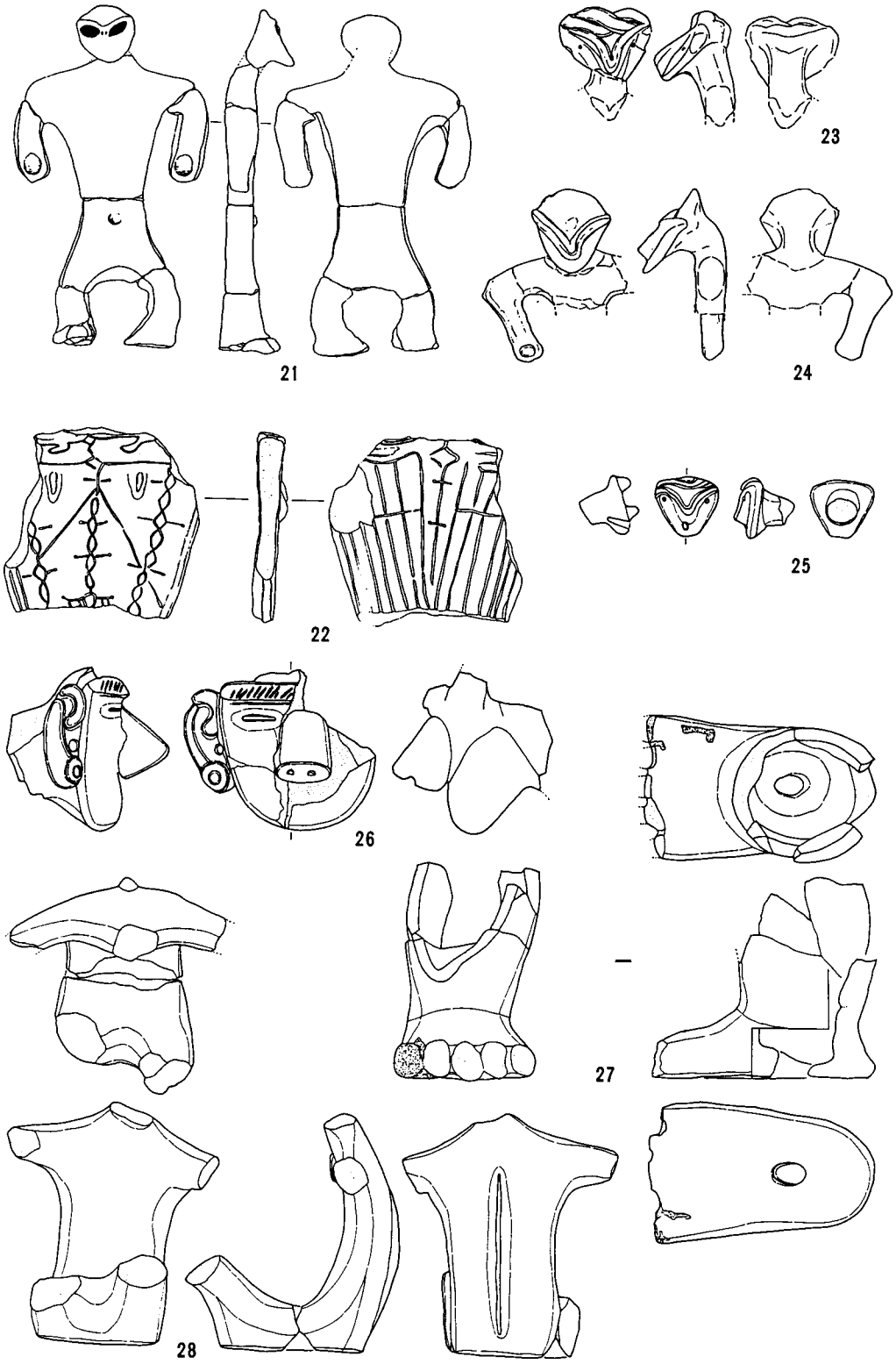

図 4　秋田県内出土の土偶(4)

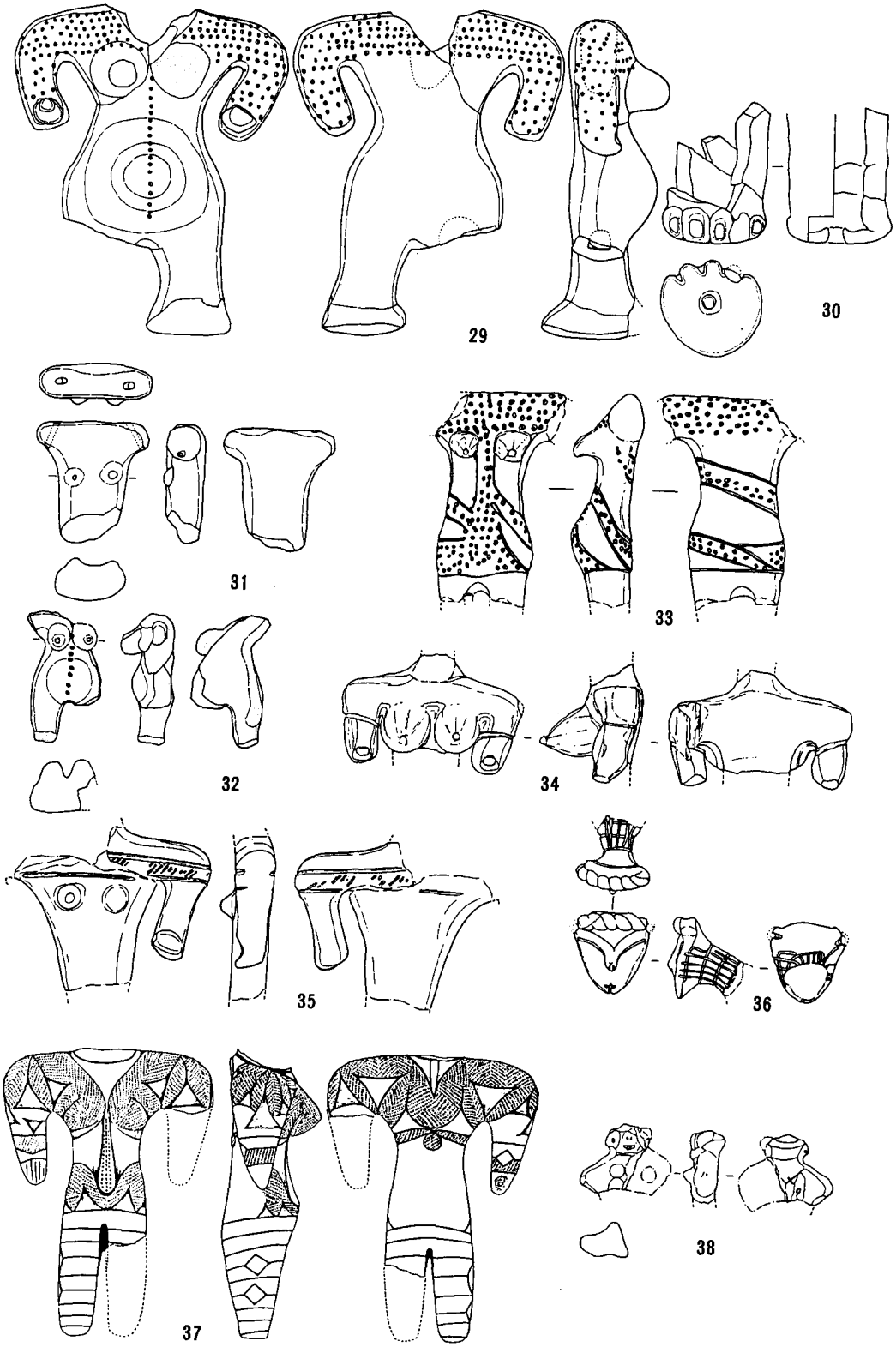

図5　秋田県内出土の土偶(5)

て斜めに貫通孔がある。これを穴の方向にしたがって上に延長して行くと顔の部分（頭）に至る。この土偶は顔を付け代えることができた土偶とも解釈できるものである。この土偶と同様，最初から頸から上を造らなかった土偶が藤株遺跡から出土している。最初から頸から上部を造らない土偶は後期中葉ごろから造られはじめたと考えられる。またポーズをとる土偶も秋田県ではこの頃から造られはじめたと考えられる。

後期後葉の土偶は中小坂遺跡（小坂町），下山寺遺跡（矢島町）などから出土しているが出土例は多くない。したがってこの時期の土偶全体がどんな様子であったか明らかではない。その中で下山寺遺跡出土の土偶は全体の姿をよく残している。頭部，左腕，左足は欠損している。土偶全体は丸味をおびている。肩幅が広く，手足の先端は棒の先のように丸味をもつ。胸，腰，腹部には沈線で区画された中に縄文が施され，三角形に無文部が目立つ文様があり，脚部には横位の沈線が間隔をおいて施され，その側面には菱形文が施されるものである。

（4） 晩期の土偶

晩期の土偶はさらに出土例が増加し，現在まで260点が57ヶ所の遺跡から発見されている。この中には麻生遺跡（二ツ井町）出土の菊池保太郎氏の所蔵品などが入っていないので，その数は300点を超すものと思われる。古くから有名な藤株遺跡（鷹巣町），麻生遺跡（二ツ井町）をはじめ，柏子所貝塚（能代市），高石野遺跡（琴丘町），地方遺跡（秋田市），兵部ヶ沢遺跡（雄物川町），湯出野遺跡（東由利町），木形台Ⅱ遺跡（協和町），岳下遺跡（神岡町），石名館遺跡（六郷町），オホン清水遺跡（横手市），上都遺跡（平鹿町），平鹿遺跡（増田町），鐙田遺跡（湯沢市）などの遺跡から多くの土偶が出土している。これらの遺跡の中で本格的に発掘調査された遺跡は少ない。また発掘調査された遺跡もその一部分が調査されているにすぎないのが現状である。これらの遺跡の中でもっとも多くの土偶を出土している遺跡は，地方遺跡の127点である。

晩期の土偶のほとんどは前半のC1式期までのものが多く，それ以降の土偶の量は急に少なくなる。これは秋田県だけの状況ではなく，東北地方全体の傾向と見てよい。この時期の土偶はいわゆる遮光器土偶がほとんどで，中実，中空のもの，それにX字形土偶などがある。しかしこれだけ多く出土している土偶の中で完全なものはほとんどない。また図化されているもの少なく，したがって図で紹介できる資料はきわめて少ないのである。晩期初頭の土偶は湯出野遺跡などから出土している。全体的に後期の面影を残し，首，腹，背面に三叉文が施されているものである。この時期のポーズをとる土偶に高石野遺跡出土の土偶がある。頭部と右足を欠損しているが他はほぼ残っており，全体の姿はよくわかる。土偶は立っており，両腕を前に組んだもので，腕輪と思われる飾りなどを施した土偶で，全体に三叉文を中心とした文様が描かれている。晩期のポーズをとる土偶は他に地方遺跡出土と思われる土偶がある。これは椅子に腰をかけているような姿で，両腕は膝の上で組んでいる。その組んだ所が平になっていて何か物でものせられるような形になっている。頸から尻まで通した穴があけられている。文様は施されていない。BC～C1式ま

表3　土偶図一覧表(3)

図No.	出土地	寸法	備考
1	大曲市	22.3cm	真崎勇助図
2	二ツ橋		近　泰知図
3	象潟町		大野延太郎図
4	中山	25.2cm	佐藤初太郎図
5	上ノ山Ⅱ	11.0cm	
6	黒倉B	20.4cm	
7	〃	6.4cm	
8	坂ノ上F	19.2cm	
9	下堤A	9.2cm	
10	中杉沢	14.3cm	
11	坂ノ上F	26.5cm	
12	萩峠	12.9cm	
13	〃	8.0cm	
14	本道端	10.2cm	
15	〃	7.2cm	
16	〃	4.8cm	
17	館下Ⅰ	12.0cm	
18	〃	15.0cm	
19	天戸森	5.0cm	
20	〃	13.0cm	
21	塚ノ下	24.0cm	目にアスファルトをつめている
22	〃	12.5cm	
23	片符沢	6.4cm	
24	〃	8.6cm	
25	八木	2.6cm	
26	〃	7.4cm	
27	〃	9.9cm	大型土偶
28	〃	11.1cm	ポーズ
29	〃	15.2cm	
30	〃	6.5cm	
31	〃	5.7cm	最初から頭部造らず
32	〃	6.1cm	
33	藤株	12.5cm	最初から頭部造らず
34	〃	6.25cm	
35	片符沢	7.2cm	
36	藤株	4.7cm	
37	下山寺	23.0cm	
38	藤株	3.75cm	
39	高石野	16.0cm	ポーズ
40	〃	4.0cm	
41	〃	2.8cm	
42	〃	5.2cm	
43	〃	8.8cm	
44	湯出野	15.8cm	
45	〃	5.6cm	
46	〃	7.6cm	
47	〃	10.2cm	岩偶
48	〃	7.8cm	
49	〃	7.5cm	
50	〃	6.4cm	
51	藤株	7.5cm	
52	平鹿	9.4cm	
53	藤株	9.5cm	岩偶
54	中山	10.8cm	
55	平鹿	8.2cm	
56	〃	6.8cm	
57	地方	6.5cm	ポーズ
58	鐙田	21.8cm	
59	〃	6.0cm	
60	〃	16.0cm	
61	〃	9.4cm	
62	横長根A	4.4cm	
63	〃	5.0cm	

出土地は遺跡名　市町名の所は出土遺跡不明のところ

では大形の遮光器土偶が藤株遺跡や石名館遺跡などから発見されている。他にも多く土偶が発見されており土偶造りの最盛期を迎えたといってよいほどである。またこの時期になるとX字形土偶も造られ麻生遺跡，藤株遺跡，高石野遺跡，木形台Ⅱ遺跡などから出土している。

後半の土偶を出土している遺跡には平鹿遺跡，鐙田遺跡などがある。晩期には土偶の他に岩偶の出土している遺跡がある。それには東在家遺跡（鹿角市），それに麻生遺跡，藤株遺跡，湯出野遺跡などがある。藤株遺跡出土の岩偶は頭部だけ残ったもので眉，目，鼻，口がしっかりと表現され，口の下にヒゲと思わせる沈線が4本縦に施されている。湯出野遺跡出土の岩偶は全体がコケシのような形状を呈し，顔がしっかり表現されている。この2点の岩偶は他のものと違っているが，それ以外の岩偶は，いわゆる遮光器の目をもつ，この時期の特徴的なものである。この特徴的な岩偶は現在のところ秋田県内では米代川流域だけからしか発見されていないものである。

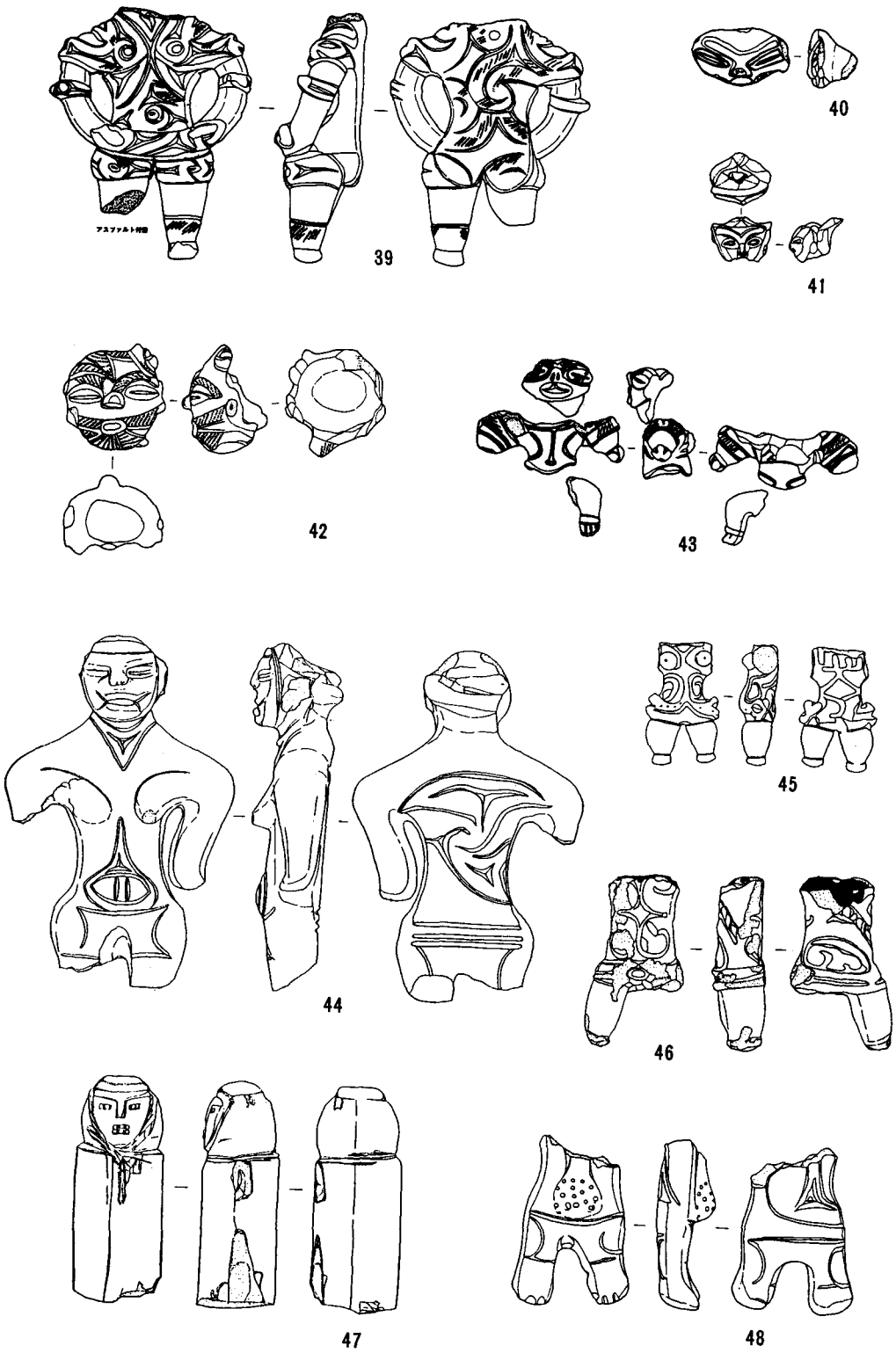

図6　秋田県内出土の土偶(6)

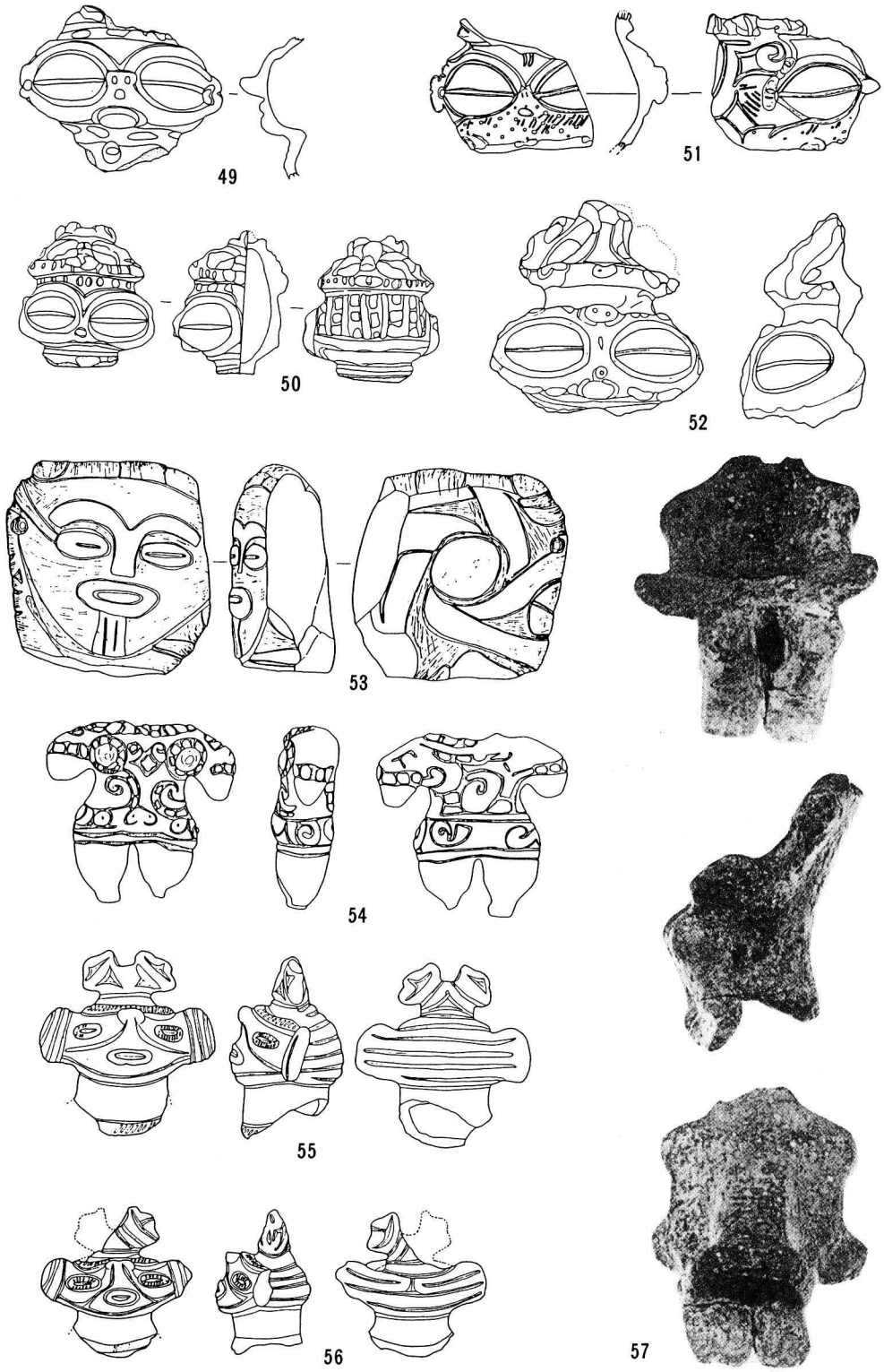

図7　秋田県内出土の土偶(7)

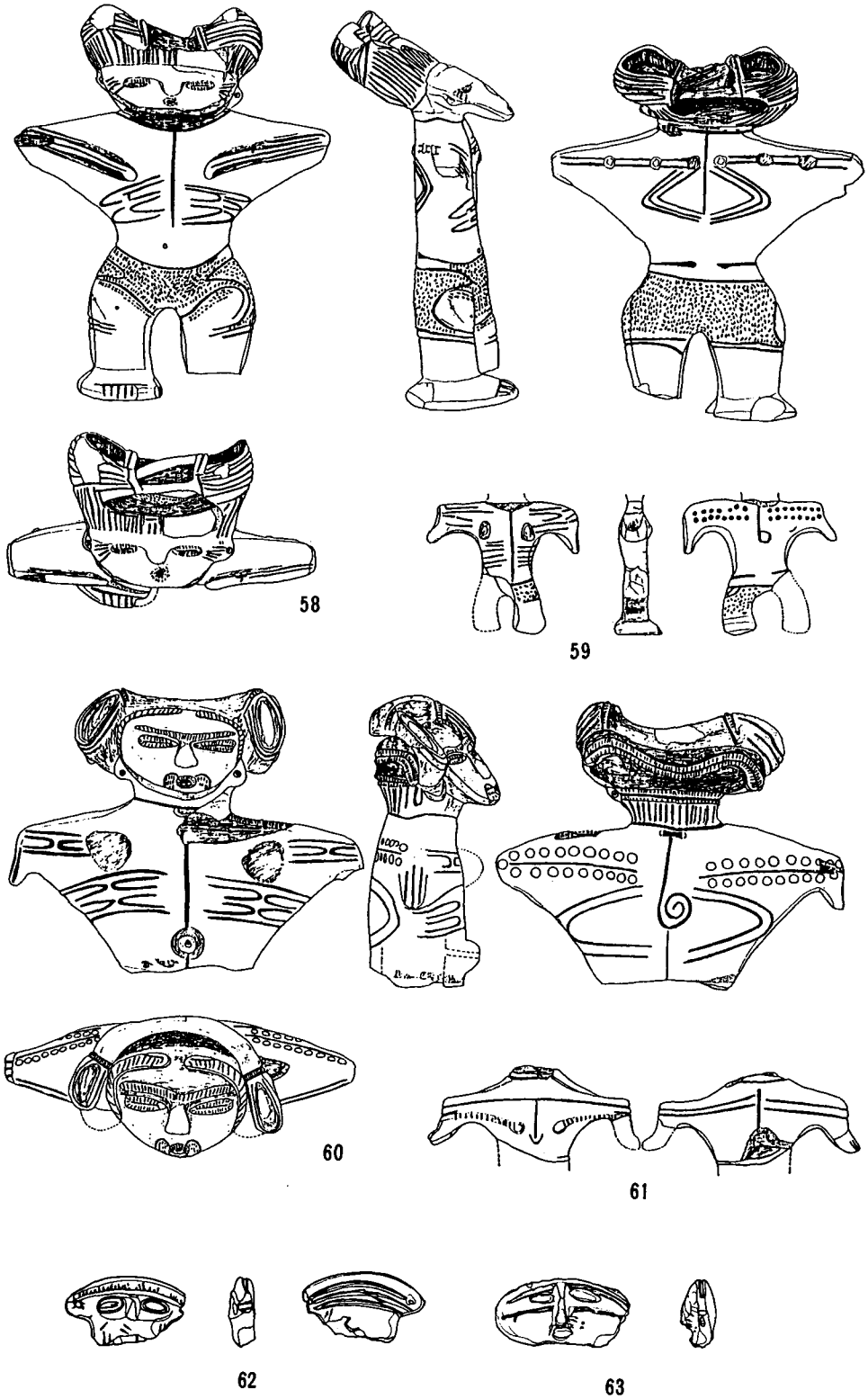

図8　秋田県内出土の土偶(8)

（5） 弥生の土偶

秋田県の中でこの時代の土偶が4ヶ所の遺跡から出土している。中でも横長根A遺跡(若美町)から9点の土偶が出土している。いずれも破片で全体の姿を推測することは不可能であるが，いくつかの特徴がある。一つは小型で板状の土偶であること，板状は縄文のそれより非常に薄く，厚さは1cm以下である。二つは顔が上端にまとまり，横長の顔になることがあげられる。横長根A遺跡の一つは口が省略され，他の一つは鼻が縦に長く表現され，その直下に口が付けられている。他に胴部の破片と思われるものもあるが，いずれも板状で薄いものである。他の二つの遺跡は潟向Ⅲ遺跡（秋田市），地蔵田B遺跡（秋田市）である。これより以降の土偶は確認されていない。

4. おわりに

以上，秋田県の土偶について概観してきたが，はじめの項で書いたように，やっと集成ができつつあるというのが現状で，研究もその途についたといったところである。

概観の結果から，秋田県の土偶は前期の中頃から造られはじめること。前期から中期にかけて秋田市と田沢湖町等を結ぶ線で分布圏を異にする円筒土器様式に伴う土偶と大木土器様式に伴う土偶とは明らかに異なること。そして大木土器様式に伴う土偶が多いこと。この違いは中期後半になっても継続し，大木土器様式の土器が北上するにしたがって大木土器様式の土器に伴う土偶が北に広がる。また秋田市周辺の海岸沿いには北陸の土器が入ってきており，その影響等も土偶に認められるのではないかと推測される。これも今後の課題の一つである。

後期以降晩期になると，その地方色がうすれるように見えるが，よく見るとこの時期にも土偶の上で地方色が存在するように思われ，これらについてもさらに土偶の集成を進め明らかにする必要があると考えている。

註

（1） 1987年7月 『図説秋田県の歴史』30・31頁 （河出書房新社）

（2） 秋田県土偶出土遺跡一覧表は冨樫が作成し，武藤が補追し表にしたものである。表1は1992年1月現在の数，表2は1989年12月までの数であり，したがって表1，2の数は一致していない。

（3） 本報告に使用した土偶の図，写真は下記の報告書等から転載したものである。

1887年　真崎勇助 「古代土偶図」『東京人類学会雑誌』第二巻18号
　　近　泰知 『植田の話』
1967年　奈良修介・豊島　昂 『秋田県の考古学』（吉川弘文館）
1973年　秋田市教育委員会 『上新城中学校遺跡とその周辺遺跡』
1974年　秋田県　〃　『鐙田遺跡発掘調査報告書』
〃　横手市　〃　『第7次中杉沢遺跡発掘調査概報』
1975年　秋田県立博物館 『真崎勇助翁コレクション図録』
1976年　秋田市教育委員会 『小阿地　下堤遺跡　坂ノ上遺跡発掘調査報告書』

1977年　秋田県立博物館　『鑓野目コレクション図録』
1978年　秋田県教育委員会　『湯出野遺跡発掘調査概報』
1979年　〃　『塚ノ下遺跡発掘調査報告書』
〃　〃　『館下Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
〃　〃　『梨ノ木塚遺跡発掘調査報告書』
1980年　〃　『片符沢遺跡Ⅰ発掘調査報告書』
1981年　秋田県教育委員会　『杉沢台・竹生遺跡発掘調査報告書』
〃　〃　『国道103号線バイパス工事関係遺跡発掘調査報告書』
〃　〃　『藤株遺跡発掘調査報告書』
1983年　〃　『平鹿遺跡発掘調査報告書』
〃　五城目町教育委員会　『中山遺跡発掘調査報告書』
〃　琴丘町教育委員会　『高石野遺跡発掘調査概報』
1984年　鹿角市教育委員会　『天戸森遺跡』
〃　五城目町教育委員会　『中山――中山遺跡発掘調査報告書』
〃　若美町教育委員会　『横長根A』
1985年　秋田市教育委員会　『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書，下堤E遺跡，下堤F遺跡，坂ノ上F遺跡，狸崎A遺跡，湯ノ沢D遺跡，深田沢遺跡』
〃　田沢湖町教育委員会　『黒倉B遺跡――第1次発掘調査報告』
1986年　比内町教育委員会　『本道端遺跡』
1987年　秋田市教育委員会　『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書，地方遺跡ノ台B遺跡』
1988年　秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ―上ノ山Ⅰ遺跡　館野遺跡　上ノ山Ⅱ遺跡』
1989年　秋田県教育委員会　『八木遺跡発掘調査報告書』

※この報告は冨樫，武藤祐浩，庄内昭男，菅原俊行が中心となって集成した土偶の図を基にして冨樫がまとめ，表の作成は武藤がおこなったものである。

冨樫泰時（秋田県埋蔵文化財センター）
武藤祐浩（秋田県埋蔵文化財センター）